

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 18世紀ウィーンにおけるジングシュピールの発展過程：時期区分の試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1986-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/685">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/685</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 18世紀ウィーンにおける ジングシュピールの発展過程

## ——時期区分の試み——

武石 みどり

### 序

ジングシュピール (Singspiel, ドイツ語による音楽喜劇) は、ドイツ演劇とオペラとの境界領域に位置し、民衆的な性格をもつため、これまで、演劇史と音楽史のどちらの分野においても副次的なジャンルとして扱われる傾向が強かった。さらに、作品の資料研究が進んでいないため<sup>1)</sup>、その実態は十分に把握されているとは言い難い。

本稿は、これまでの演劇学と音楽学の研究成果に立脚して、18世紀のウィーンにおけるジングシュピールの発展過程を劇場運営体制と音楽的内容との両面から段階的に捉え、時期区分を試みようとするものである<sup>2)</sup>。

#### 1. 対象とする年代

本稿で対象とするのは、1710年頃から1810年頃までの100年間にウィーンで作られたジングシュピール、及びその前身と考えられる音楽付きの喜劇 (Komödie mit Arien) である。

1600年代には、ウィーンには公共の劇場がなく、イタリア・オペラは宮廷内部の劇場で貴族向けに上演されていた<sup>3)</sup>。しかし、18世紀にジングシュピールが生まれるもととなったのは、こうした貴族向けのイタリア・オペラではなく、市民向けに上演されていたドイツ語の喜劇と考えられている<sup>4)</sup>。この喜劇役者達は、ウィーン市から演劇活動の許可を受け、市内の広場やバルハウス (Ballhaus) と呼ばれる球戯場<sup>5)</sup>を借りて、風刺的な即興喜劇を見せていた<sup>6)</sup>。ところが、この即興喜劇には大勢の観客が集まるため、騒音や火事の原因となり、上演場所の問題が深刻化したため、ウィーン市は1708年に市民劇場の建設を計画し、宮廷との折衝の末、1709年、ケルントナートア (Kärntnertor) 劇場と呼ばれる初の市民劇場を設立した<sup>7)</sup>。この劇場で1710年頃から活動を始めたドイツ人喜劇役者シュトラニツキー (Stranitzky) の喜劇に、18世紀のウィーン・ジングシュピールの芽を見い出すことができる。

これを発端に、18世紀後半に成立したウィーンのジングシュピールは、1810年頃から内容的変質への道をたどることになった。ジングシュピールの生まれたウィーンの二つの公共劇場、ケルントナートア劇場とブルク (Burg) 劇場は、この時期を境に、オペラ、或いはドイツ演劇の殿堂という、性格の異なる二つの道を歩み始める<sup>8)</sup>。また、ウィーン郊外のレオポルトシュ

タット (Leopoldstadt) 劇場で上演され続けた民衆喜劇は、挿入楽曲の数と長さが縮小され、台詞を強調するために、次第に独唱曲に重点を置いた挿入歌付き喜劇 (Posse mit Gesang) へと変質した<sup>9)</sup>。

本稿では、1710年以前、及び1810年以降を考察の対象外とし、以下に、1710年頃から1810年頃までの100年間におけるウィーン・ジングシュピールの発展過程の時期区分を試みる。

## 2. 時期区分

1710年頃から1810年頃までのウィーン・ジングシュピールの発展過程は、以下の五つの時期に区分することができる。この五つの時期のそれぞれにおけるウィーンの演劇の状況、上演記録、及びその音楽的内容は次のとおりである (表1参照)。

### 第1期 1710年頃～1726年

〔状況〕 アレクサンダー・フォン・ヴァイレンの「ウィーンの演劇」第1巻 (1899年) によれば<sup>10)</sup>、この時期、1709年に完成された新しい公共劇場のケルントナートア劇場で、喜劇役者アントン・シュトラニツキー (Anton Stranitzky) 1676～1726 が活動し、ハンスヴルスト (Hanswurst) という道化役の類型を確立して、ウィーン市民の間で人気を博した。

〔上演記録〕 シュトラニツキーの喜劇の上演記録は遺っていない。

〔音楽的内容〕 Haupt- und Staatsaktionen と呼ばれるシュトラニツキーの喜劇は、14作品の台本が伝承されている<sup>11)</sup>。ヴァイレン (1899年) は、それらの作品が、宮廷内で上演されていたイタリア・オペラを下敷きとして作られたものであることを明らかにした<sup>12)</sup>。すなわち、既存のイタリア・オペラから筋書きの骨格だけを探り、アリアやレチタティーヴォのほとんどを台詞に変えて作った喜劇とすることができる。オットー・ロンメル (1952年) は、シュトラニツキーの8作品の台本とその典拠となっているイタリア・オペラの台本とを比較検討し、シュトラニツキーが改作の段階でアリアの数を約3分の2に減らしているものの、いくつかのアリアを残し、或いはアレクサンダー詩行の形で挿入しているため、これをジングシュピールの原形と考えることが可能であることを指摘した<sup>13)</sup>。しかし、この挿入歌がどのようなものであったかを示す楽譜は伝承されていない。ロンメル (1952年) は、シュトラニツキーの喜劇における音楽の役割は副次的なものでしかなかったと指摘しているが<sup>14)</sup>、ピーター・ブランスコム (1971/72年) は、1700年代初頭の資料の記述に基づき<sup>15)</sup>、すでにこの段階で音楽が重要な要素であったと主張している<sup>16)</sup>。

### 第2期 1726年～1750年頃

〔状況〕 オスカル・トイバーの「ウィーンの演劇」第2巻第1部 (1896年) によれば<sup>17)</sup>、シュトラニツキー亡きあと、1728年からケルントナートア劇場の監督となった宮廷舞踊家ジョゼフ・セリエル (Joseph Selliers) ?~?と宮廷歌手フランチェスコ・ボロジーニ (Francesco

表 1 1710年頃から1810年頃までのウィーン・ジングシュピールの発展過程（特に□部分）

時期	場所 年代	宮内劇場	Ballhaus	ケルントナートア劇場	ブルク劇場	レオポルトシュ タット劇場	フライハウス 劇場
第一期	1710年頃	貴族向けにイ タリア・オペ ラを上演 ↓ 1744	喜劇役者が活動 ↓ 1731 イタリア語 ↑ musica ↓ bernesca の上演 ↓ 1748	1709 開場 1710～シュトラニツキーによる Haupt- u. Staatsaktionen (イタリア・オペラを下敷き とする, アリア付きのドイツ 喜劇)	1748 イタリア・オペラ用に開 場 1752 「フランス劇場」となる オペラ・コミークの導入 1760～イタリアものとフランス ものを上演 グルックのオペラ改革, オペ ラ・ブッフアの導入 1766～興行主の交替に伴い, さ まざまなジャンルを上演	レオポルトシュ タット劇場	フライハウス 劇場
第二期	1726年			1726～プレハハウザー, クルトツ, ヴァイスケルンらのドイツ喜 劇とインテルメッツォ (アリ アを歌う習慣が受け継がれ, 加えて, musica bernesca の 影響を受ける)			
第三期	1750年頃		1750年～クルツの喜劇における 音楽的發展 ハイドン「せむしの悪魔」				
第四期	1760年代 初頭		1760年頃～シュテファニー, ゾネンフェルスらによる, ド イツ演劇確立への努力 (文学 的演目が増加)				
第五期	1778年		ドイツ演劇, ジングシュピー ル以外のジャンルを上演 1787 デイッターズドルフ「精 神病院の恋」 1796 シェンク「村の床屋」 1810 ギロヴェッツ「だまされ た詐欺師」	1776 「ドイツ国民劇場」開場 1778～国民ジングシュピールの 上演 1783～イタリア・オペラの上演 再開	1781 開場 1794 W. ミュラ ー「プラハの姉 妹」	1787 開場 1789 シヤックと ゲール「2人の アントン」 1791 モーツァル ト「魔笛」	
	1810年頃						

Borosini) ?~? は、イタリア喜劇とドイツ喜劇の他にイタリア・オペラを上演することを望んだが、オペラについては皇帝の許可を得られず、代わりに、ドイツ喜劇のあいまに歌と踊り付きインテルメッツォを上演することを許可された。また、1731年からは、フランツィスカーナ広場脇のバルハウスで、イタリア語の音楽付き道化芝居——いわゆる *musica bernesca* 18)——の上演を許可された。

〔上演記録〕 シュトラニツキーの後を継いだ喜劇役者ゴットフリート・プレハウザー (Gottfried Prehauser) 1699~1769らによるドイツ喜劇の上演内容については、まとまった記録がほとんど遺っていない。

他方、インテルメッツォについて、ローベルト・ハース (1925年) は、当時出版された台本とその広告から1728年から1748年までの上演記録の集約を試み、その結果、*intermezzi musicali*, *musica bernesca*, *musikalisches Schauspiel*, *musikalisches Zwischenspiel* などと題された73作品の題名とその上演年月日を確認した<sup>19)</sup> (表2参照)。これらのインテルメッツォや *musica bernesca* の台本の多くはイタリア語とドイツ語で出版されており<sup>20)</sup>、トイバー (1896年) は、イタリア語とドイツ語で交替に上演されたものと推測している<sup>21)</sup>。また、いくつかの台本の登場人物欄には、プレハウザーの役名 (ハンスヴルスト) を見い出すことができ<sup>22)</sup>、ドイツ人喜劇役者がインテルメッツォや *musica bernesca* にも出演し、両者の間に交流があったことがうかがわれる。

表2 1728~48年の間に確認しうるインテルメッツォの上演数

年	<i>musikalisches Schauspiel</i>	<i>intermezzi musicali</i>	<i>musica bernesca</i>	<i>musikalisches Zwischenspiel</i>	<i>musikalische Komödie</i>	計
1728	2					2
1729		1				1
1730		4	1	2		7
1731		4	2	2		8
1732	2		1	6		9
1733				8		8
1734				6	1	7
1735	3					3
1736	5					5
1737	5					5
1738	1	1		3		5
1739	5					5
1740	4					4
1741	1					1
1746		1				1
1747	1					1
1748	1					1
						73

〔音楽的内容〕 この時期にドイツ喜劇の中で歌われたアリアは、*Teutsche Comödie Arien*

と呼ばれ、オーストリア国立図書館には、アリアの歌詞を記した写本 (Texthandschrift) が伝承されている<sup>23)</sup>。ハースの報告 (1925年) によると<sup>24)</sup>、Texthandschrift は4巻から成り<sup>25)</sup>、1737年から1757年までに作られた合計260作品、1696曲のアリアと重唱曲、合唱曲を含んでいる (表3参照)。そのうち、第1巻から第3巻までには1737年から1751年までのアリア、第4巻には1752年から1757年までのアリアの歌詞が含まれている<sup>26)</sup>。第1巻から第3巻までの内容に相応するアリアの楽譜は伝承されていないが、ハースは、歌詞の構造から見て、この時期のアリアには単純な有節形式が多く用いられているものと推測している。

表3 Teutsche Comödie Arien, Texthandschrift の内容

	作品数	楽曲数	(内訳)					
			合唱	ヴォード ヴィール	五重唱	四重唱	三重唱	二重唱
第1巻	53	445	8				1	50
第2巻	66	437	6	4		2	3	49
第3巻	66	408	8					54
第4巻	75	406	18	4	3	7	11	53
計	260	1696						

一方、この時期にインテルメッツォを作曲した人物として、当時の台本のうち、1728年秋に上演された *musikalisches Schauspiel* “Bacco trionfante dall’ Indie” (ドイツ語タイトル “Der aus Indien zurückkehrend-triumphierende Baccus”) の台本にフランチェスコ・ピルカー (Francesco Pircker) 1700~86の名を<sup>27)</sup>、また1734年6月頃に上演された *musikalische Komödie* “La vilanella fatta contessa per amore” (ドイツ語タイトル “Die durch die Liebe zu einer Gräfin gemachte Bäuerin”) の台本<sup>28)</sup> にヨハン・イグナツ・バイヤー (Johann Ignaz Beyer) ?~?の名を見い出すことができる<sup>29)</sup>。

ハース (1925年, 1925/26年) によれば<sup>30)</sup>、この時期に上演されたインテルメッツォや *musica bernesca* は、イタリア・オペラや北ドイツのオペラの台本を翻案して新しい音楽を付けたものであった。ハースの紹介している台本は、風刺に満ちた喜劇的内容のストーリーにアリア、重唱、合唱を挿入した形を示しており、これをジングシュピールと考えることが可能である。

### 第3期 1750年代~1760年代初頭

〔状況〕 トイバーの「ウィーンの演劇」第2巻第1部 (1896年) によれば<sup>31)</sup>、1748年、女帝マリア・テレージア (Maria Theresia) 1717~80の支配下で新しく劇場管理者の地位に就いたイタリア人、ロッコ・ロ・プレスティ (Rocco Lo Presti) 1704~? により、ウィーンの二番目の公共劇場としてブルク劇場が開場された。イタリア・オペラの上演に使われていた宮廷劇場が1744年に閉鎖されたため、ブルク劇場はイタリア・オペラのための劇場とされ、市民向

けにドイツ喜劇を見せるケルトナートア劇場とは対照的な性格を与えられた。1752年には劇場管理者がフランツ・エステルハージー (Franz Esterházy) 伯爵 1715~85<sup>32)</sup> に替わり、さらに元ウィーン駐在ジェノヴァ大使のジャコモ・ドゥラッツォ (Giacomo Durazzo) 伯爵 1714~94 がその後を継ぐと、フランス文化導入政策に基づき、ブルク劇場におけるイタリア・オペラの上演は停止され、フランスから演劇団とバレエ団が招聘されて、ブルク劇場は「フランス劇場 (Théâtre-Français près de la Cour)」と呼ばれるようになった。ドゥラッツォの指導により、作曲家クリストフ・ヴィリバルト・グルック (Christoph Willibald Gluck) 1714~87 はフランス語のオペラ・コミックを作曲した。

一方、1750年代にケルトナートア劇場で活動していたドイツ人喜劇役者の中心人物、ヨーゼフ・フェリックス・フォン・クルツ (Josef Felix von Kurz) 1717~83は、ハンスヴルストと

表 4 1750~1776年のケルトナートア劇場の上演記録数

年代	ド イ ツ 喜 劇			ド イ ツ 演 劇		ドイツ・ バレエ
	Comoedie	Lustspiel	Posse	Schauspiel	Trauerspiel	
a. 1750	10					
1751	16	1				
1752	32	1		1		17
1753	73(+56)	8		5	4	14
1754	27(+22)	3	4	1	5	13
1755	9	3	8		2	13
1756	12(+3)	6	4	1	1	15
1757		2				
1758	6	3			1	
1759	1			1	1	
1760	2	7	1		6	
1761	2	5		1	1	
b. 1762	①	⑦			②	
1763		⑧+5			3	
1764	1	13	1	1	3	
1765		13				
1766	3	8	1		1	
1767	2	12			2	
1768	1	3		3	1	
1769		16		7	2	
1770	1	30	2		3	
1771		16		3	2	
1772	1	15		2	5	
1773	1	14		4	3	
1774		16		1	3	
1775		16		2	2	
1776		4				

( ) は上演記録が「~年頃」とされているもの  
丸中数字は、ケルトナートア劇場の火災閉鎖中、ブルク劇場で上演されたもの

は異なる新しい喜劇役者の類型，クルツ・ベルナルドン（Kurz Bernardon）を生み出して人気を得るとともに，音楽的要素のより豊かなドイツ語喜劇を作り出して，ジングシュピールの発展に貢献した。

〔上演記録〕 当時の資料や記録，伝承されている台本に基づいて，上記の2つの劇場における上演記録の集約を試みたグスタフ・ツェッヒマイスター（1971年）によると<sup>33)</sup>，1750年から1761年までの間，ケルトナートア劇場ではおもにドイツ喜劇，ドイツ悲劇，ドイツ・バレエなどが上演された。その上演記録の数は，ドイツ喜劇が半数以上を占め，特に *teutsche* (*deutsche*) *Comoedie* と呼ばれる喜劇の上演記録が目立って多い（430作品中271作，全体の63%）（表4 a 参照）。

〔音楽的内容〕

#### 1) *Teutsche Comoedie Arien* の音楽的発展

この時期のアリアの歌詞は，前述のオーストリア国立図書館の *Texthandschrift* の第4巻に含まれている<sup>34)</sup>。ハース（1925年）は，この第4巻の内容を検討し，第1巻から第3巻までと比較して，アリアの歌詞が，年代とともに単純な有節歌曲の形式から自由な通作的な形式へと変化していることを報告した<sup>35)</sup>。

これと並んで，オーストリア国立図書館には，*Teutsche Comedie Arien* と題するアリアの筆写譜（*Musikhandschrift*）が伝承されている<sup>36)</sup>。この筆写譜を初めて詳しく検討したハースの報告（1920/21年）によると<sup>37)</sup>，*Musikhandschrift* は18世紀に筆写されたもので，レチタティーヴォ1曲，アリア22曲，二重唱6曲，三重唱2曲，四重唱2曲を含んでいる<sup>38)</sup>。ハースは，*Musikhandschrift* の歌詞と前述の *Texthandschrift*，ウィーン市立図書館に伝承されている台本集<sup>39)</sup>，及び「1752年から1757年までのウィーンの演劇レポーター」<sup>40)</sup> とを照合した結果，*Musikhandschrift* に含まれる合計33曲のうち28曲の歌詞が *Texthandschrift* の第4巻に含まれ，これらの作品が1754年から1758年までの間に上演されたものであることを確認した。すでに *Texthandschrift* の内容から推測されていたとおり，*Musikhandschrift* に含まれる楽曲は，単純な有節歌曲の他に，拍子やテンポの変化，効果的な間奏や伴奏や転調などを伴う通作作品を全体の2分の1弱含み，音楽的に豊かな内容を示している。

この時期，1752年に上演されたと思われるフリードリヒ・ヴィルヘルム・ヴァイスケルン（Friedrich Wilhelm Weiskern）1710~68作の喜劇“Bernardon, der verliebte Weiberfeind”の台本<sup>41)</sup>には，作曲者としてアダルベルト・ファウナー（Adalbert Fauner）?~1769の名前が記されている<sup>42)</sup>。また，フランツ・ハダモスフスキー（1959年）は，「1753年から1754年にかけての劇場収支決算書」<sup>43)</sup>に，1754年1月12日上演のフーバー（Huber）?~?作の喜劇“Leopoldel in Africa”<sup>44)</sup>，“Zauberin Circe”（上演日不明），及び1754年2月16日上演<sup>45)</sup>の“Ramildo und Egissa”のためのアリアの作曲報酬がヨーゼフ・ツィーグララー（Joseph Ziegler）1722~67<sup>46)</sup>へ，さらに1754年頃に上演されたフーバー作の喜劇“Der aus dem Mond gefallene Slav”<sup>47)</sup>のためのアリアの作曲報酬がツィーグララーとエーダー（Eder）?~?<sup>48)</sup>に支払われた記録がある



ことを報告している<sup>49</sup>)。また、ハース (1920/21年) によれば、「1752年から1757年までのウィーンの演劇レパートリー」には、この時期のケルントナート劇場におけるアンサンブルの編成が、ヴァイオリン10、ヴィオラ2、チェロ2、コントラバス2、フルート1、オーボエ2、ファゴット1、ホルン2と記録されている<sup>50</sup>)。

## 2) ハイドンのジングシュピール「せむしの悪魔」

ヨーゼフ・ハイドン (Joseph Haydn) 1732~1809 から晩年に伝記事実を聞き書きしたゲオルク・アウグスト・グリーンガーは、ハイドンが19歳の頃、ウィーンの町でセレナードを弾いていてクルツと知り合い、クルツのためにオペラ「せむしの悪魔 (Der krumme Teufel)」を作曲したと伝えている<sup>51</sup>)。19世紀のハイドンの研究者カール・フェルディナント・ポール (1875年) は、この喜劇の題名が、「1752年から1757年までのウィーンの演劇レパートリー」に載っていないことから、「せむしの悪魔」は1751年の末、或いは1752年の復活祭以前に上演されたものと推定した<sup>52</sup>)。

ウラディミール・ヘルフェルト (1922/23年) は<sup>53</sup>)、西モラヴィアのヤロミェルジチェ (Jaroměřice) に居城を構えたヨハン・アダム・クヴェステンベルク (Johann Adam Questenberg) 伯爵 1678~1752のウィーン駐在秘書ホフマン (Hoffmann) ?~?の報告をもとに、「せむしの悪魔」と同じ題材の喜劇“Le diable boiteux”が1738年7月16日に、またドイツ語のタイトル“Der krumme Teufel”では1738年11月5日にウィーンで上演されていたこと、よってこの題材はクルツが編作する前からウィーン市民に知られていたと考えられることを明らかにした。また、ハダモフスキーは (1959年)、「1753年から1754年にかけての劇場収支決算書」に、クルツがケルントナート劇場で活動していた期間中、1753年5月29日に「せむしの悪魔」の上演記録があることを報告している<sup>54</sup>)。

現在、「せむしの悪魔」の台本は2種類伝承されている。ウルフ・ビルバウマー (1969年) によれば<sup>55</sup>)、一方の台本 A<sup>56</sup>) は出版年、出版地ともに不明で、「新・せむしの悪魔 (Der neue krumme Teufel)」と題され、子供のパントマイム“Arlequin Der neue Abgott Ram in America”とインテルメッツォ“Il vecchio ingannato”が挿入されている。但し、ハース (1925年) は、このインテルメッツォに、1758年以降クルツの妻となったテレージア・クルツ (Teresia Kurz) ?~? が出演しており、また1757年のカルロ・ゴルドーニ (Carlo Goldoni) 1707~93作の喜劇“*Il viaggiatore ridicolo*”の aria が引用されていることから、この台本Aは1758年頃に作られたものと推測している<sup>57</sup>)。台本Aの末尾には、「このオペラ・コミックとパントマイムの音楽はヨーゼフ・ハイデン氏 (Herr Joseph Heyden) の作曲による」という注が記されている。もう一方の台本 B<sup>58</sup>) は、「せむしの悪魔、アスモデウス (Asmodeus, der krumme Teufel)」という題で1770年に出版されたもので、台本Aに含まれるインテルメッツォを含まず、作曲家についても言及していない。

ハース (1925年) は<sup>59</sup>)、1751年の段階ではクルツの子供達が小さすぎて台本Aに含まれる子供のパントマイムを上演するのが不可能であること、また、上述のように台本Aに含まれ

るインテルメッツォの上演が1758年以降初めて可能であることを指摘し、よって、台本 A は1751年の台本の新しい拡大版であると主張した。そして、グリーンガーの記述と台本 A における注記に基づき、ハイドンが1751年の「せむしの悪魔」と1758年の「新・せむしの悪魔」の両方の台本に作曲したと推測した。これに対して、ヘルフェルト (1922/23年) とビルバウマー (1969年) は<sup>60)</sup>、「せむしの悪魔」の題材がすでに早くから知られていたことを重視し、「新・せむしの悪魔」という題名は、クルツがこの題材を取り上げた時 (1751年頃) から付けられていたものと推測している。

ハイドンは、1805年に作成した作品目録“Haydn Verzeichnis”の64ページに「せむしの悪魔」を記録しているが、その冒頭楽譜を記入していない<sup>61)</sup>。また、筆写譜、出版譜もまったく伝承されていないために、その音楽がいかなるものであったかを知る手掛りはない<sup>62)</sup>。但し、台本 A によれば、このジングシュピールはアリアで始まり、最後は合唱で幕を閉じ、その間に、アリア、レチタティーヴォ、二重唱、合唱が挿入された形となっている。また、ビルバウマー (1969年) は、台本 A と台本 B の内容を比較し、パントマイムの部分で (フィアメッタ Fiametta 役、すなわちテレージア・クルツの) アリアの数が5曲、3重唱が2曲、合唱が3曲ふえていることに注目し、これを、アリア付きの喜劇からジングシュピールへの発展を示す徴候と捉えている<sup>63)</sup>。

### 3) Teutsche Comoedie Arien とハイドンとの関係

前述の Texthandschrift 及び Musikhandschrift には、「せむしの悪魔」のアリアは含まれていない。しかし、ハース (1925年) は、Texthandschrift 第4巻 (1752～57年)、及び Musikhandschrift (1754～58年) の成立と、ハイドンの「せむしの悪魔」の作曲とが年代的に近いことから、この時期の Teutsche Comoedie Arien の音楽的發展にハイドンが貢献した可能性があり、Musikhandschrift にハイドンの作が含まれている可能性があることを示唆した<sup>64)</sup>。さらに、エヴァ・バドゥラ＝スコダ (1972年) は、Musikhandschrift に含まれるアリアとハイドンの初期作品 (クラヴィーア・ソナタ、ディヴェルティメントなど) との間に、旋律構造や音型、和声構造の点で共通性が見られることを具体的に例示している<sup>65)</sup>。

## 第4期 1760年代初頭～1777年

〔状況〕 ツェッヒマイスターの「オーストリア演劇史」第3巻第2部 (1971年) によれば<sup>66)</sup>、1759年以降、ブルク劇場ではフランス演劇とイタリア・オペラとが併せて上演されるようになり、1762年にはグルックが改革オペラの新作「オルフェオとエウリディーチェ (Orfeo ed Euridice)」を発表した。しかし、1766年以降、劇場運営の経済的行き詰まりのため、ブルク劇場の興行主はかなり頻繁に入れ替わり、それに従って上演内容も、イタリア・オペラ、オペラ・ブッファ、フランス・バレエ、オペラ・コミックなど、さまざまなものが採り上げられた。

一方、ケルトナートア劇場では、第3期に活躍した喜劇役者クルツが1760年にウィーンを去り、プレハウザー、ヴァイスケルン、フィリップ・ハフナー (Phillipp Hafner) 1731～64、

らの役者達も相次いで世を去り、1769年にウィーンに再登場したクルツはもはや成功を得られなかった<sup>67)</sup>。その間、即興性のある喜劇よりも、文学的題材に基づく演劇への志向が高まり、ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス (Joseph von Sonnenfels) 1733~?らは、国民を啓蒙する教育的娯楽としてのドイツ演劇を打ち立て、またそのために国民劇場 (Nationaltheater) を設立することを切望した。俳優兼台本作家のクリスティアン・ゴットリーブ・シュテファニー (Christian Gottlieb Stephanie) 1734~98らは、レッシングの作品やフランス演劇、イタリア演劇の改作を紹介し、また自ら文学性のある新作の台本を書き下ろした。

〔上演記録〕 ツェッヒマイスター (1971年) のまとめた上演記録によると<sup>68)</sup>、この時期、ケルトナートア劇場では主にドイツ喜劇とドイツ悲劇が上演された。中でも、特に deutsches Lustspiel と呼ばれる喜劇の上演記録が目立って多い (261作品中191作、全体の73%) (表4b参照)。deutsches Lustspielは、即興性を含む teutsche (deutsche) Comoedie とは異なり、すべて書き下ろされた台本に基づく喜劇である。

〔音楽的内容〕 喜劇の中でアリアを歌う習慣が deutsches Lustspiel にも受け継がれかどうかは不明であるが、上演記録の中には、音楽付き喜劇であることを示す呼称の付いた作品を7作見出すことができる。まず、1764年7月11日に上演された“Die Hofmeisterin”<sup>69)</sup>と1765年1月20日に上演されたクリスティアン・ゴットロープ・クレム (Christian Gottlob Klemm) ?~? 作の“Philint und Cleone”<sup>70)</sup>、及び1770年8月11日に上演されたベーム (Boehm) ?~? 作の“Die zwei Schwestern von ungleicher Neigung”<sup>71)</sup>は deutsches musikalisches Lustspiel, 1770年に上演された“Die Herrschaftskuchel auf dem Lande mit Bernardon dem dicken Mundkoch, oder Die versoffnen Köche und die verliebten Stubenmädel” (クルツ作)<sup>72)</sup>は deutsches pantomimisches Singspiel という呼称で呼ばれている。また、1772年2月19日に上演された“Pigmalion” (ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau) 1712~78 原作, ヨーゼフ・ラウデス (Joseph Laudes) ?~? 編作, フランツ・アスペルマイヤー (Franz Aspelmayr) 1728~86 作曲)<sup>73)</sup>には deutsches Singspiel, 1773年に上演された“Der glückliche Schatzgräber”<sup>74)</sup>には komisches Singspiel という呼称が付けられている。さらに、1772年7月11日に上演された“Das Gespant mit der Trommel” (カール・ディッターズ・フォン・ディッターズドルフ (Karl Ditters von Dittersdorf) 1739~99作曲?)<sup>75)</sup>には deutsche Oper という表示が付いている。

しかし、この時期の作品の楽譜資料の多くは散逸し、その音楽の具体的内容については明らかではない。

#### 第5期 1778年~1810年頃

〔状況〕 ヴァイレンの「ウィーンの演劇」第2巻第2部 (1903年) によれば<sup>76)</sup>、1776年、皇帝ヨーゼフ (Joseph) II世1741~90は、ブルク劇場をドイツ語圏の模範的な劇場、すなわちドイツ国民劇場 (Deutsches Nationaltheater) として貴族と市民の両方に開放し、特に良質な

ドイツ語オリジナル演劇と他国語からの翻訳劇を選んで上演するという方針を打ち出した。また、もともと音楽劇に大きな関心を抱いていたヨーゼフⅡ世は、併せて、ドイツ語による音楽劇を作り出すという試みを行うことに決定した。こうして、1778年2月、パウル・ヴァイトマン(Paul Weidmann) 1748~1801作、イグナツ・ウムラウフ (Ignaz Umlauf) 1746~96作曲のジングシュピール「鋳夫 (Die Bergknappen)」を皮切りに、ブルク劇場、すなわちドイツ国民劇場において国民ジングシュピール (Nationalsingspiel) の上演が開始された。しかし、ヨーゼフⅡ世は、この時期に発表された作品に満足せず、むしろ、ドイツの劇音楽が立ち遅れ、イタリア・オペラのレベルに追いつくだけでも精一杯であるという現実を認識した。そこで、国民ジングシュピール育成の試みは1783年まで打ち止め、ブルク劇場では再びイタリア・オペラが上演されるようになった。その後、ジングシュピールの上演は、ケルントナートア劇場(1785年~)の他、ウィーン郊外に設立された2つの劇場、レオポルトシュタット劇場(1781年~)とフライハウス (Freihaus) 劇場 (1787~1801年) で行なわれた。

〔上演記録〕 オットー・ミヒトナーの研究 (1970年) によれば<sup>77)</sup>、1778年から1783年までの間に国民劇場で初演された国民ジングシュピールには、オリジナル作品の他、オペラ・コミックやオペラ・ブッフアからの翻訳、改作も多数含まれていた (49作品中29作、全体の59%) (表5参照)。また、ハダモフスキー (1934年, 1966年) とオットー・エーリッヒ・ドイチュ (1937年) の研究によれば、レオポルトシュタット劇場<sup>78)</sup>、ケルントナートア劇場<sup>79)</sup>、およびフライハウス劇場<sup>80)</sup>では、それぞれ表6に示したように、ウィーンの作曲家のジングシュピールの初演記録が遺っている。

表5 1778~83年の国民ジングシュピール初演作品数

年	オリジナル作品	オペラ・コミックの改作 (音楽は新)	オペラ・コミックの翻訳	オペラ・ブッフアの翻訳	その他
1778	5	1	6	1	
1779	1	1	6	2	
1780	2	1	3	2	1
1781			2	6	3
1782	2				1
1783	2			1	
計	12*	3	17**	12	5

\* うち4作はウムラウフの作曲

\*\* うち10作はグレットリーの作曲

〔音楽的内容〕 国民ジングシュピールとしてオリジナル作品を発表した主な作曲家は、前述のウムラウフであり、同じ時期にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart 1756~91の「後宮からの逃走 (Die Entführung aus dem Serail)」(1782年)も初演された。また、レオポルトシュタット劇場では主にヴェンツェル・ミュラー (Wenzel Müller) 1767~1835, フェルディナント・カウアー (Ferdinand Kauer) 1751~1831, ヴィンツェンツ・トゥチュク (Vincenc Tuček) 1773~1821らの作品、ケルントナートア劇場ではアダルベ

表 6 1781~1810年の3つの劇場におけるウィーンの作曲家のジングシュピール初演作品数

年	レオポルトシュタット劇場	ケルントナートア劇場	フライハウス劇場
1781			
1782			
1783			
1784			
1785	1		
1786	3	3 + 1 (ブルク劇場)	
1787	2	3	
1788	1		
1789			6
1790	3		6
1791	3		5
1792	5		2
1793	3		4
1794	2		4
1795	4	3	3
1796	3	2	1
1797	2	2	5
1798	2		7
1799	1	4	7
1800	2	1	8
1801	1	1	1
1802	3	1	
1803	4		
1804	7		
1805	5		
1806	4		
1807	4	3	
1808	5	3	
1809	5	3	
1810		4	
主な作曲家と 作品数	W. Müller 37 Kauer 16 Tuček 8	Gyrowetz 6 Süßmayr 6 Schenk 5 Weigl 4 Dittersdorf 3	Schack 又は } 14 Gerl } Seyfried 15 Lickl 9

ルト・マティアス・ギロヴェッツ (Adalbelt Mathias Gyrowetz) 1763~1850, フランツ・クサヴァー・ジュースマイヤー (Franz Xaver Süßmayr) 1776~1803, ヨハン・バプティスト・シェンク (Johann Baptist Schenk) 1753~1836, ヨーゼフ・ヴァイクル (Joseph Weigl) 1766~1846 らの作品, またフライハウス劇場ではベネディクト・シャック (Benedikt Schack) 1758~1826 とフランツ・クサヴァー・ゲール (Franz Xaver Gerl) 1764~1827, イグナツ・クサヴァー・フォン・ザイフリート (Ignaz Xaver von Seyfried) 1776~1841 らの作品が初演された。これらの

作品には, *Singspiel*, *Komische Oper*, 及び *Zauberoper* といった呼称が付けられている<sup>81)</sup>。

このうち, 現在校訂楽譜の出されている作品<sup>1)</sup>を概観すると, 冒頭に序曲があり, アリア, 重唱, 合唱などを台詞でつないでいく形で, 幕の最後には合唱を含むフィナーレがある。すなわち, イタリア・オペラの形式に準じながら, レチタティーヴォの代わりにドイツ語の台詞を語るジングシュピールの形が, この時期に初めて整ったものと考えられる。

### 3. 総括

1710年頃から1810年頃までの100年間におけるウィーン・ジングシュピールの発展過程は, 上記のように, 五つの時期に区分できる。第1期は, 喜劇にアリアを挿入する習慣の確認する萌芽期として, 第2期は *musica bernesa* の影響によりアリアの挿入の定着した時期として, 第3期はアリアの音楽的発展の時期として, 第4期は即興性のある喜劇から台本に基づく喜劇への変質期として, また第5期は, 皇帝ヨーゼフ II 世の奨励によりジングシュピールの形が整えられた時期として捉えることができる。

このうち, 楽譜資料が遺っているのは, 第3期の *Teutsche Comoedie Arien* の *Musikhandschrift* と第5期のジングシュピール作品だけである。前者の *Musikhandschrift* については, 台本とアリアと作曲家の照合が今後の大きな課題であるといえよう。これに対して, 研究の進展がより期待できるのは, 作曲者と作曲年代の確定の可能な第5期のジングシュピール作品である。今後, 資料研究と様式研究とを通して, その具体的な特徴を明らかにしていくことが期待される。

(本学講師＝音楽理論担当)

#### 注

- 1) 例えば, 現在校訂楽譜の出版されているウィーン・ジングシュピールは, 以下の11曲のみである。

Mozart : *Bastien und Bastienne* (1768) NMA II : 5/iii (1974)

*Zaide* (1779-80) NMA II : 5/x (1957)

*Die Entführung aus dem Serail* (1782) NMA II : 5/xii (1982)

*Der Schauspieldirektor* (1786) NMA II : 5/xv (1958)

*Die Zauberflöte* (1791) NMA II : 5/xix (1970)

Haydn : *Philemon und Baucis* (*Singspiel/Marionettenoper*) (1773) JHW XXIV/1 (1971)

Umlauf : *Der Bergknappen* (1778) DTÖ Bd. 36 (1911)

Dittersdorf : *Doktor und Apotheker* (1786) (ed. by E. Fischer and F. Gessner, Berlin, 1943)

*Betrug durch Aberglauben* (1786) (Leipzig : Peters, s. d.)

*Hieronymus Knicker* (1789) (ed. by Kleinmichel, Leipzig, 1890 ; Wien, s. d.)

Schenk : *Der Dorfbarbier* (1796) DTÖ Bd. 66 (1927)

- 2) 本稿は, 昭和61年2月8日, 音楽学会関東支部第184回例会(於: 慶応義塾大学)で発表した内容に, 修正を加えたものである。同じ視点に立った先行研究として, ピーター・ブランスコーム(1971/72年)の論考では, 18~19世紀におけるウィーン民衆演劇の音楽の発展段階を, 以下の3つの時期

に大きく区分している。(1) 1710～1726年(シュトラニツキーの活動期), (2) 1730年代～1770年(クルツ・ベルナルドンの活動期), (3) 1770～1840年(郊外劇場の発展期)。Branscombe 1971/72.

- 3) Weilen 1899: 104-105
- 4) Branscombe 1971/72: 101-103
- 5) 皇帝フェルディナント (Ferdinand) I 世 (1503～64) の時代以来, ウィーンには, スペイン由来の球戯のために建てられたバルハウスが四つあった。いずれも, 17世紀初頭には使われなくなり, ミハエラー広場脇の宮廷バルハウスを除いて, ヒンメルプフォルト通り, タインフェルト通り, およびフランツィスカーナ広場脇の三つの建物が喜劇の上演に用いられるようになった (Weilen 1899: 116)。
- 6) Weilen 1899: 116.
- 7) Weilen 1899: 124.
- 8) Hadamowsky 1966 : VII.
- 9) NG vol. 13, 589; vol. 15, 152.
- 10) Weilen 1899 : 121-139.
- 11) オーストリア国立図書館所蔵のマニュスクリプト (所蔵番号不明)。Payer von Thurn 1908 & 1910 に収録, 出版されている。
- 12) Weilen 1899 : 132.
- 13) Rommel 1952 : 235-236.
- 14) Rommel 1952 : 236.
- 15) 例えば, 1709年のニーダーエスタライヒ政府の文書 (Wien, Archiv des Ministeriums des Innern, IV, M. 6, 1709, Nr. 17) に, ドイツ人喜劇役者は「その喜劇の中で良い音楽を奏し (verschafften gueten music) .....」とある。(Glossy 1897 : 244)
- 16) Branscombe 1971/72 : 102.
- 17) Teuber 1896 : 28-32.
- 18) トスカーナ地方の有名な詩人フランチェスコ・ベルニ (Francesco Berni) (c. 1497～1535) のような風刺的様式の道化芝居を指す。(Teuber 1896 : 32)
- 19) Haas 1925 : 9-19. Schenk 1969 : 161-190 では, Pirker 1927 & 1929 他に基づき, ハースの報告に補足を加えている。
- 20) Weilen 1917 : 114
- 21) Teuber 1896 : 32.
- 22) Haas 1925 : 10-12.
- 23) オーストリア国立図書館 Handschriftensammlung Cod. ms. 12706-12709.
- 24) Haas 1925 : 25-32.
- 25) このうち, 第1巻と第2巻は Pirker 1927 & 1929 に収録されている。
- 26) Tulla 1918 : 172.
- 27) Haas 1925 : 9. ピルカーは, その後, 1736年にグラーツのピエトロ・ミンゴッティ (Pietro Mingotti) のオーケストラのヴァイオリン奏者となり, 1737年にマリアンネ・フォン・ガイヤーゼック (Mari-

- anne von Geyerseck) と結婚した。この妻は、その後まもなく、マリアンネ・ピルカーとして有名な歌手となった。(Haas 1925/26 : 201-202)
- 28) オーストリア国立図書館 4906A (Haas 1920/21 : 412)
- 29) Haas 1925 : 13. ハースは、1733年にウィーンの宮廷楽長ヨハン・ヨーゼフ・フックス (Johann Joseph Fux) (1660~1741) が緊急に作曲家を必要としていたにもかかわらず、イタリア語の知識の不足を理由に、バイヤーの宮廷作曲家志願を却下したと伝えている。(Haas : 1920/21 : 412)
- 30) Haas 1925 : 22-25, Haas 1925/26.
- 31) Teuber 1896 : 38-78.
- 32) フランツ・エステルハージー伯爵はハンガリーの宮廷顧問官で、その葬儀に当たって、モーツァルトがフリーメソンの葬送の音楽 (K. 477) を作曲したことで知られている。その従兄のニコラウス・フォン・エステルハージー (Nicolaus von Esterházy) 伯爵 (1711~64年) はロシア駐在オーストリア大使で、その妻マリア・アンナ (Maria Anna, nee Princess Lubomirska) は、ハイドンの勤めるエステルハージー侯の屋敷に出入りしていた記録がある。(Landon 1980 : 358-359, 379-380, 403)
- 33) Zechmeister 1971 : 408-479
- 34) Tulla 1918 : 172.
- 35) Haas 1925 : 27.
- 36) オーストリア国立図書館 Musiksammlung Sign. 19062-19063. DTÖ の第64巻 (1926年) 及び第121巻 (1971年) として出版されている。
- 37) Haas 1920/21 : 405
- 38) Musikhandschrift における曲の配列順序が Texthandschrift における配列順序と異なっている理由について、ヘルベルト・ツェーマン (1971年) は、実際の演奏を目的として並べ換えたものと推測している。(DTÖ Bd. 121 (1971) : X)
- 39) ウィーン市立図書館 Sign. 22200A.
- 40) Répertoire des Théâtres de la Ville de Vienne depuis l'année 1752 jusqu'à l'année 1757. Wien : Ghelen, 1757.
- 41) オーストリア国立図書館 2932-A. M., ウィーン市立図書館 A-13257. (Zechmeister 1971 : 422)
- 42) ファウナーは、三位一体教会の合唱指導者で、1769年3月13日に聖シュテファン教会の墓地に埋葬された記録がある。(Haas 1925 : 58)
- 43) Wien, Hofkammerarchiv, Hoftheaterrechnungen. (元オーストリア国立図書館 Ser. nova 1940). Hadamowsky 1959 に収録されている。
- 44) Zechmeister 1971: 451. この歌詞は、Texthandschrift 第4巻に含まれている (Nr. 243)。(Haas 1925 : 38).
- 45) Zechmeister 1971: 452.
- 46) ツィーグララーは聖シュテファン教会のヴァイオリニストをも勤め、1753年頃、作曲家ディッターズドルフに、ヴァイオリンを教えた。(NG vol. 20, 679).
- 47) Zechmeister 1971: 445. この歌詞は、Texthandschrift 第4巻に含まれている (Nr. 242)。(Haas



- 1925 : 38).
- 48) エーダーは、ケルトナートア劇場バレエ団の第1 ヴァイオリン奏者であった。(Zechmeister 1971 : 137)
  - 49) Hadamowsky 1959 : 5-6
  - 50) Haas 1920/21 : 412.
  - 51) Griesinger 1963 : 14-15. アルベルト・クリストフ・ディースは、この逸話をハイドンが21歳の頃のこととして伝えている。(Dies 1963 : 97-98).
  - 52) Pohl 1875 : 152 (Anm. 53).
  - 53) Helfert 1922/23 : 200, 202, 204.
  - 54) Hadamowsky 1959 : 8.
  - 55) Birbaumer 1969 : 204-205, Hoboken 1971 : 440-441.
  - 56) ウィーン市立図書館 22200-A, プラハ・ラデニン (Radenin) 図書館 Nr. 729. Rommel 1935 : 85-133 に所収, 出版されている。
  - 57) Haas 1925 : 55-56.
  - 58) ウィーン市立図書館 23848-A. Deutsche Schaubühne Bd. 25 (オーストリア国立図書館 392. 620-A/25.)
  - 59) Haas 1925 : 55-56.
  - 60) Helfert 1922/23 : 200, Birbaumer 1969 : 209-211.
  - 61) Larsen 1979 : 116.
  - 62) Hoboken 1971 : 440-441.
  - 63) Birbaumer 1969 : 293-300.
  - 64) Haas 1920/21 : 411-412.
  - 65) Badura-Skoda 1972 : 62-64, 69-72.
  - 66) Zechmeister 1971 : 176-179, 240, 248, 397, 468-562.
  - 67) Raab 1899 : 121, 175-179.
  - 68) Zechmeister 1971 : 480-562, 577-578.
  - 69) 台本 : オーストリア国立図書館 392. 620-A, Bd. 1. (Zechmeister 1971 : 493)
  - 70) 台本 : オーストリア国立図書館 392. 620-A, Bd. 157. (Zechmeister 1971 : 496)
  - 71) Zechmeister 1971 : 521.
  - 72) 台本 : オーストリア国立図書館 641. 433-A. M. X, 2. (Zechmeister 1971 : 517)
  - 73) 台本 : ウィーン市立図書館 A-101. 812. (Zechmeister 1971 : 533)
  - 74) 台本 : ウィーン市立図書館 A-13. 492, オーストリア国立図書館 392. 620-A. 57, Bd. 212. (Zechmeister 1971 : 541)
  - 75) Zechmeister 1971 : 536.
  - 76) Weilen 1903 : 1-86.
  - 77) Michtner 1970 : 456-473.
  - 78) Hadamowsky 1934.

- 79) Hadamowsky 1966.  
 80) Deutsch 1937 : 30-45.  
 81) Hadamowsky 1934, Hadamowsky 1966, Deutsch 1937 : 30-45.

#### 文献一覽

Badura-Skoda, Eva :

- 1972 Teutsche Comoedie Arien und Joseph Haydn. In : Der junge Haydn. Kongressbericht Graz 1970. (Hrsg. v. Vera Schwarz) Graz : Akademische Druck- und Verlagsanstalt. S. 69-72.

Birbaumer, Ulf :

- 1969 Das Werk des Josef Felix von Kurz-Bernardon und seine szenische Realisierung. Ph. D. Wiener Universität.

Branscombe, Peter :

- 1971/72 Music in the Viennese Popular Theatre of the Eighteenth and Nineteenth Centuries. In : Proceeding of the Royal Musical Association XCVIII, S. 101-112.

Deutsch, Otto Erich :

- 1937 Das Freihaustheater auf der Wieden, 1787-1801. Wien-Leipzig : Deutsche Verlag für Jugend und Volk.

Dies, Albert Christoph :

- 1810 Biographische Nachrichten von Joseph Haydn Wien : Camesinische Buchhandlung. Tr. with introduction and notes by Vernon Gotwals, Madison : University of Wisconsin Press, 1963.

Glossy, Carl :

- 1897 Zur Geschichte der Wiener Theatencensur. In: Jb. der Grillparzer-Gesellschaft VII, S. 238-340.

Griesinger, Georg August :

- 1810 Biographische Notizen über Joseph Haydn. Leipzig : Breitkopf & Härtel. Tr. with introduction and notes by Vernon Gotwals, Madison : University of Wisconsin Press, 1963.

Haas, Robert :

- 1920/21 Teutsche Comedie Arien. In : Zeitschrift für Musikwissenschaft III, S. 405-415.  
 1925 Die Musik in der deutschen Stegreifkomödie. In : Studien zur Musikwissenschaft XII, S. 3-64.  
 1925/26 Wiener deutsche Parodieopern um 1730. In : Zeitschrift für Musikwissenschaft VIII, S. 201-225.

Hadamowsky, Franz :

- 1934 Das Theater der Wiener Leopoldstadt, 1781-1860. (Kataloge der Theatersammlung der Nationalbibliothek in Wien Bd. III) Wien : O. Höfels' Wwe.

1959 Das Spieljahr 1753/54 des Theaters nächst dem Kärntnerthor und des Theaters nächst der k. k. Burg. In : Jb. der Gesellschaft für Wiener Theaterforschung XI. S. 3-21.

1966 Die Wiener Hoftheater (Staatstheater) 1776-1896. Verzeichnis der aufgeführten Stücke mit Bestandsnachweis und täglichem Spielplan. Teil 1 (1776-1810). (Museion. Veröffentlichungen der österreichischen Nationalbibliothek. Neue Folge I/4) Wien : Georg Prachner Verlag.

Helfert, Vladimir :

1922/23 Zur Geschichte des Wiener Singspiels. In : Zeitschrift für Musikwissenschaft V, S. 194-209.

Hoboken, Anthony van :

1971 Joseph Haydn. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis. Bd. 2 (Vokalwerke). Mainz : Schott.

Landon, H. C. Robbins :

1980 Haydn. Chronicle & Works. vol. 1 (Haydn : the Early Years 1732-1765). Bloomington (Ind.) and London : Indiana University Press.

Larsen, Jens Peter :

1979 Three Haydn Catalogues. Second Facsimile Edition with a survey of Haydn's oeuvre. New York : Pendragon Press.

Michtner, Otto :

1970 Das alte Burgtheater als Opernbühne : von der Einführung des deutschen Singspiels (1778) bis zum Tod Kaiser Leopolds II (1792). (Theatergeschichte Österreichs Bd. III/1) Graz-Wien-Köln : Böhlau Nachf..

Payer von Thurn, Rudolf :

1908 & 1910 Wiener Haupt- und Staatsaktionen. Schriften des Lieterarischen Vereins in Wien X & XIII. Wien.

Pirker, Max (Hrsg). :

1927 & 1929 Teutsche Arien, welche auf dem kayserlich-privilegirten Wienerischen Theatro in unterschiedlich producirten Comoedien, deren Titul hier jedesmahl beygerucket, gesungen worden. (Museion. Veröffentlichungen aus der Nationalbibliothek in Wien) Bd. 1 (1927), Bd. 2 (1929), Wien-Prag-Leipzig : Strache.

Pohl, Carl Ferdinand :

1875 Joseph Haydn. Bd. 1. Berlin : A. Sacco.

Raab, Ferdinand :

1899 Johann Joseph Felix von Kurz, genannt Bernardon. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Theaters im 18. Jahrhundert. Frankfurt a. M. : Rütten & Loening.

Rommel, Otto :

1935 Die Maschinenkomödie. Barocktradition im österreichisch-bayerischen Volkstheater Bd.

1. Leipzig : Sammlung Deutsche Literatur Reclam.

1952 Die alte Wiener Volkskomödie. Ihre Geschichte vom Barocken Welt-Theater bis zum Tode Nestroys. Wien : A. Schroll.

Schenk, Eleonore :

1969 Die Anfänge des Wiener Kärntnertortheaters 1710-1748. Ph. D. Wiener Universität.

Teuber, Oskar :

1896 Das k. k. Hofburgtheater seit seiner Begründung. (Die Theater Wiens II/1) Wien : Gesellschaft für vervielfältigende Kunst.

Tulla, Artur :

1918 Wiener Stegreifkomödien aus den Jahren 1752-1757. In : Zeitschrift für Bücherfreunde 10/11, S.169-172.

Weilen, Alexander von :

1899 Geschichte des Wiener Theaterwesens von den ältesten Zeiten bis zu den Anfängen der Hoftheater. (Die Theater Wiens I) Wien : Gesellschaft für vervielfältigende Kunst.

1903 Das k. k. Hofburgtheater seit seiner Begründung. (Die Theater Wiens II/2/1) Wien : Gesellschaft für vervielfältigende Kunst.

1917 Das Theater : 1529-1740. (Die Geschichte der Stadt Wien Bd. 4) Wien.

Zechmeister, Gustav :

1971 Die Wiener Theater nächst der Burg und nächst dem Kärntnerthor von 1747 bis 1776. (Theatergeschichte Österreichs Bd. III/2) Graz-Wien-Köln : Böhlau Nachf..

#### 文献略号

DTÖ : Denkmäler der Tonkunst in Österreich. Wien : Österreichischer Bundesverlag. 1894-1959 ; Graz : Akademische Druck- und Verlagsanstalt, 1960-.

JHW : Joseph Haydn : Werke. Joseph Haydn-Institut (ed.), München/Duisburg : Henle, 1958-.

NG : The New Grove Dictionary of Music and Musicians. 20 vols. Stanley Sadie (ed.), London : Macmillan, 1980.

NMA : W. A. Mozart Neue Ausgabe sämtlicher Werke. Internationale Stiftung Mozarteum Salzburg (ed.), Kassel : Bärenreiter, 1955-.